

に出会うほどであるが、全体を貫く強烈な問題意識は19世紀ハンガリー(及び東欧)における経済発展の不均等性の歴史的解明にあるといえる。第2次世界大戦後から現代に至るハンガリー史(東欧史)は本著作で分析された「長い19世紀」における不均等発展の克服過程である、と著者はみている。

では、著者のいう、そしてその解明のために本書が捧げられているともいえる「不均等発展」とは一体何であるのか。評者なりにまとめてみると、次の3つの点に要約できる。まず第1には、農業における不均等発展であり、巨大地主経営の西欧(主としてオーストリア・ボヘミア)市場と結びついた強化・発展と、富農的な上昇への極限られた可能性、あるいは「上方硬直的な農民層分解」の結果として生み出された膨大な下層農民・半プロレタリア層との対比である。第1部と第2部はこの点を歴史的・構造的に明らかにしようとしたものである。著者はハンガリー農業の資本主義的発展を一応はプロシヤ型と規定することができるとしつつも、こうした不均等性に着目してプロシヤ型発展の母国・プロイセンとの隔たりを描き出している。また、ハンガリーでは「ユンカー層」へと発展すべき旧領主階級の内部においても分化が生じ、強化・拡大される巨大地主とは対蹠的に、農奴解放に至るまでのブルジョアの発展の担い手であった中・小の土地持ち貴族は、資本主義的経営への移行に必要な資金を賄うことができず、全体として没落の道をたどっていったとされる。

第2の不均等発展は工業・資本形成におけるそれである。ハンガリーは西欧への農産物供給国となると同時に、西欧の工業製品の市場ともなり(特に共通関税圏を形成するオーストリア・ボヘミアとの分業関係が重要)、国内での工業的発展が大きく制限される。そして、西欧資本主義の利害に対応した形でハンガリーの産業構造の形成が行なわれ、しかもそこでの資本形成は、当時の西欧での独占・金融資本の形成に規定されて、当初から独占・金融資本の形成として現われてくるとされる。もっとも、他方では民族的資本の独自の形成・抬頭も語られており、ハンガリーにおける資本主義化が単なる先進的な西欧資本主義への従属化ではなかったことをうかがわせてもいる。第3部が以上の点の解明にあてられている。

さて、第3の不均等性は、ハンガリー一國を離れて、東欧諸国相互の関係の中に見られるとされる。つまり、東欧諸国間での資本・貿易・分業関係における不均等発展であり、その1つの局面は、東欧の中で比較的進んだオーストリア・ハンガリー(及びロシア)が西欧に従属し

南塚 信吾

『東欧経済史の研究』

——世界資本主義とハンガリー——

ミネルヴァ書房 1979.12 369+28 ページ

本書は著者の過去10年に亘るハンガリーを中心とした東欧経済史研究の諸成果の集大成であり、また、外国での研究の邦訳を除けば、19世紀のハンガリー経済を全体として体系的に論じた邦語での最初の著作である。すでに豊富な研究蓄積を有するロシア史を別とすれば、東欧史はあまり研究の進んでいなかった分野だけに、本書のもつ意義は大きい。

さて、本書の章立ては、第1部「東欧の農奴解放」、第2部「ハンガリーにおける農業の資本主義的発展」、第3部「ハンガリーにおける金融資本の形成」、第4部「第一次世界大戦前の東欧をめぐる資本輸出入関係」となっており、前半では農業問題に、後半では資本の問題に焦点をあてている。但し、本書の論述の仕方は、著者自身が述べているように、通史的でも概説的でもなく、問題索出的である。もっとも、本書の白眉といえる第3部では、1世紀近くに亘るハンガリー経済の展開が資本形成のあり方を軸として時系列にそって論じられており、この部の諸章は1つの独立した19世紀ハンガリー経済史として読むこともできる。

さて、著者によって索出された個々の問題は叙述のあちこちに散りばめられており、読み返す度に新たなもの

つつも、東欧の中のより後進的なバルカンへ進出し、これを支配してゆくという支配—従属の二重構造であり、いま1つの局面は、このオーストリア・ハンガリー(及びロシア)を含めた先進資本主義に支配されたバルカンの諸小国が互いに隣接し合いながら、「相互に結びつく方向を発展させえな」かったという分断性である。資本輸出入関係、貿易関係の分析を通して第4部でこの点が明らかにされている。

以上の紹介からわかるように、本書での主たる論点は、これらの不均等性が分業関係及び資本関係を媒介として形成された西欧資本主義への従属によって生み出されたのだとする点にある。本書の副題である「世界資本主義とハンガリー」はこの脈絡の中で理解され、また、この不均等発展の諸相と不均等発展を生み出した要因は、本書で主たる分析の対象となったハンガリーについてだけでなく、他の東欧諸国にも概ね妥当しうるものであり、ここに本書が『東欧経済史の研究』と題される所以がある。

このように、本書は19世紀のハンガリーを西欧(ひいては世界)資本主義との関連の中で説くことによってハンガリーの経済発展の特質を描き出すことに成功しているのであるが、しかし、西欧資本主義との関連だけではどうしても説ききれない部分を残してしまっており、このことが本書の論述の流れに一定程度での歯ぎれの悪さを与えることになっている。この歯ぎれの悪さは、さしあたっては、市場論的接近の不十分さとして現われているように思われる。以下ではこの点について触れてみる。

本書では不均等発展の1つの重要な局面として中農の肥大化現象、及び小数の独占をとり囲む「広範な小工業の大海」の存在が繰り返し強調されている。しかし、こうしたいわば農工での小営業の広範な残存・拡大が農民層の「上方硬直的な分解」、あるいは金融資本の早期的形成とどのように構造的に係わっているのかは必ずしも十分に説明されていない。一般に、帝国主義段階には中農が肥大化する傾向があるといわれるが、ここでの小営業の広範な存在がそうしたものとして理解されていることをうかがわせる箇所もあるが、体系的な説明として与えられているわけではない。広範に存在する小営業の歴史的性格は何であったのか。農奴解放前のハンガリーでは繊維工業の展開や広範な市場町の形成に示されるように、小営業に基礎をおく地方的な市場=分業関係が成立していた。この点は本書でも触れられている。とすると、西欧とハンガリーの分業関係の18世紀末からの、とりわけ19世紀後半からの拡大は、こうした既存の地方的市場との確執の中で進行したはずである。本書で述べら

れた不均等発展の帰結は既存の地方市場—地方的分業体系の解体、そして西欧との分業を基にした外にむいた国内市場構造の構築であろう。現実の歴史過程が示している小営業の広範な残存、拡大は果してこうした国内市場の再編の結果であるのか、あるいは既存の地方的分業関係の強化・発展であるのか。この点の解明は19世紀ハンガリー経済を理解する上で極めて重要であるが、本書は十分な説明を与えていない。(因みに、ハンガリーの経済史学においてもこうした市場論的研究はほとんどなされていないのが現状である。)このため、本書の叙述においても、例えば、第3部の諸章での重要な論点たる工業援助法の性格規定に不統一がみられる、あるいは数多くの地方的小銀行設立についての説明が十分にできていない、といった問題点がでてきているように思われる。また、さらには、この小営業の問題は第2次世界大戦後の歴史とも関連してくる。つまり、著者が絶えず念頭においているという人民民主主義革命により、本書で分析されたいわば突出した資本主義的諸関係が取り除かれ、これにより不均等発展を克服してゆく第一歩が踏み出されるのであるが、その後の発展は、その結果として残された農工の小営業者と労働者大衆によって担われなければならない。確かに現実の過程もそうであった。そうであるならば、この広範な農工の小営業が「長い19世紀」の中でいかなる形で存在していたのか、そしていかなる歴史的発展をとげたのかを解明することは、著者の問題関心にひきよせても重要・不可欠であるといえよう。また、第2次世界大戦直後において、独立小農業者党という小営業層に基盤をもつ党が共産党・社民党などの左派政党を尻目に国会議席の過半を占めていたことを考えるとき、小営業層の重要性が一段と浮かび上がってくる。

とはいえ、本書は当初から問題を世界資本主義との関連の中で、しかも東欧全体を展望しつつ、ハンガリーの19世紀の経済を説くことに限定しているともいえ、こうしたいわば一国的ともいえる観点は意図的に背後におしやられているのかもしれない。現在のハンガリー—経済史学が従来の教条主義的な、そしてあまりにも一国的な叙述方法への反省の上立っていること、そして著者がこうしたハンガリー—史学の動向を十二分に踏まえていることを考えるなら、本書にみられるような国際的観点の強調は当然の結果であるともいえる。従って今後の研究の方向は、本書で解明された経済発展の特質を前提とし、ここで指摘した市場論的接近方法を介して東欧各国における不均等発展の諸相を個別に描き出してゆくことにあるといえよう。

[家田 修]